

『後撰和歌集』注釈

— 卷五秋上(1) —

言語文化学科―
 卷六 秋中…門倉 浩 『古代研究』(早稲田大学)

凡例

井川健司*

序言

一、本稿は研究会活動による成果の一部である。
 一、本研究会は、井川健司・井川裕子・門倉浩・久保木寿子・実川恵子・内藤明・吉川栄治の七名で構成し、各巻分担方式による『後撰集』全巻の注釈を目標とする。

一、注釈が完了している四季部の内、春上・秋中の六巻について、以下の各誌に順次発表してゆく予定(巻号は未定)。

- 巻一 春上…久保木寿子 『白梅学園短期大学紀要』
- 巻二 春中…実川恵子 『文教大学女子短期大学部研究紀要』
- 巻三 春下…吉川栄治 『滋賀大国文』・『滋賀大学教育学部紀要』
- 巻四 夏…内藤明 『早稲田大学人文自然科学研究』
- 巻五 秋上…井川健司 『明星大学研究紀要』―日本文化学部・

【勘物】

底本には処々に定家書き入れの勘注がある。当該箇所には「勘」記号で位置のみを示し、勘物本文は直後の「勘物」欄に示す。

【表記】

【底本】 高松宮旧藏天福本を用い、日大為相筆本により補訂。なお、単行本として刊行の際には定家自筆時雨亭文庫本に差し替える予定。

1 仮名遣いは、底本の表記を改め歴史的仮名遣いに統一した。付属語の「ん」「らん」「けん」「なん」は「む」「らむ」「けむ」「なむ」に統一。また、「梅」は「うめ」、「馬」は「うま」を用いる。

2 送り仮名は、「給(へ)る」のように通行の送り仮名を補う。

3 踊り字は本来の文字に改め、底本表記は右括弧中に傍記。

4 漢字仮名表記は原則として底本のまま。ただし、付属語の漢字表記・宛字・異体字・固有名詞の誤字や宛字は改訂し、底本表記を右括弧中に傍記した。

5 連語の略表記については、固有名詞として略表記の定着したもの(「寛平御時」等)や送り仮名の省略が慣用化しているもの(「歌合」等)を除き、「梅(の)花」のように本行中に補う。

【朱注】 底本には行成筆本による校異が朱で書き込まれている。当該箇所には「朱」記号のみを傍記し、「朱注」欄にその本文を示す。

【校異】 底本とは系統の異なる代表的伝本六種による校異を示す。

1 本文当該位置に番号を傍記し、「校異」欄にその本文を示す。

2 底本にない本文は見出しを付けず「〇〇アリ」とする。

3 底本にあって校異本にない本文は「〇〇―ナシ」とする。

4 句順前後は「〇〇〇〇―〇〇〇〇上(下)ニアリ」のように処理する。

5 同一異文内における校異諸本略号の掲出順は、底本との親疎による。序列は次項参照。

6 諸本の略号は次の通り。

中院本(中)・承保三年本(久)・雲州本(雲)・堀河本(堀)・片仮名本(片)・二荒山本(荒)

【出典】 1 歌集名は、『万葉』『古今』『六帖』のように略称を原則とする。

2 歌合名は、原則として『歌合大成』に従う(年号は略)が、寛平后宮歌合については通称に従う。

3 『後撰集』は「本集」と記す。

【作者】 『後撰集』の和歌作者については、刊行時に作者略伝を付す予定なので、当面の注釈対象とはしていない。詞書中に出てくる人物で注の付されていないものは本集作者である。

【諸注】 参考とした注釈と略称は以下の通り。その他の歌学書は原題のまま引用。

『聞書注』……藤原為家?『後撰集聞書注』

『正義』……昇蓮?『後撰集正義』

『抄』……北村季吟『後撰集抄』

『雑考』……契沖『契沖雑考』

『口訣』……北村季吟『後撰集口訣』

『増抄』……萩原宗固『後撰集増抄』

『つかね緒』……本居宣長『後撰集詞のつかね緒』

道麿『疑問』……田中道麿『後撰集疑問』

磯足『疑問』……加藤磯足『後撰集疑問』

『新抄』……中山美石『後撰集新抄』

『標注』……岸本由豆流『後撰集標注』

『講義』……佐佐木信綱『後撰集講義』

『選釈』……久松潜一『八代集選釈』

『評釈』……久松潜一『八代集評釈』

『秀歌』……窪田空穂『平安秀歌』

『名歌選釈』……岸上慎二『平安名歌選釈』(昭三九・七『国文学』)

『鑑賞』……杉谷寿郎『後撰和歌集』(角川鑑賞日本古典文学7所収)

『全釈』……木船重昭『後撰和歌集全釈』(笠間古典注釈叢刊13)

『大系』……片桐洋一『後撰和歌集』(岩波新日本古典文学大系6)

『叢書』……工藤重矩『後撰和歌集』(和泉古典叢書3)

秋上^{①②}これさだのみこの家の歌合に^{③④}

よみ人しらず

217 にはかにも風のすずしくなりぬるか秋立（つ）日とはむべもいひけり

〔朱注〕 1 哥 2 のうた

〔校異〕 ① 秋—秋哥（久雲） ② これさだ—惟喬（雲） ③ 歌合に—哥合

の哥（雲片荒）哥会（堀）

〔語釈〕 ○これさだのみこの家の歌合 是貞親王（？—九〇七？）は光孝天皇第二皇子、母は班子女王。宇多天皇の同腹の兄。当歌合は、現存資料で判断する限り九〇首以上の秋歌から成っており、そのうち一六首が『菅家万葉』に採録されることから（当歌も含まれる）、同集撰進の寛平五年（八九〇）九月以前に催されたことは確実である。 ○には

かにも 物事・状態が生起したり変化したりする場合に、時間的に間髪を入れないこと（「野分たちて、にはかに膚寒き夕暮の程」『源氏』桐壺）。 ○なりぬるか 『増抄』が「成ぬるか、は哉也」と註するよう

に、「か」は終助詞で詠嘆を表わす（「静けくも岸には波は寄せけるかこれの屋通し聞きつつ居れば」『万葉』巻七¹²³⁷・「ふるさとを峰のかすみは隔つれど眺むる空は同じ雲井か」『源氏』須磨）。 ○むべ 「なるほ

ど」と納得する気持を表わす。（「とどめあへずむべもととはいはれけりしかもつれなくする齢ひか」『古今』雑上⁸⁹⁸）。当歌では、上句に示されている意外な現象が、丁度秋立つ日にあたって生じていることに思

い至り、その点（秋立つ日）に対してなるほどと納得したものである。

〔訳〕

是貞親王家での歌合に、

にわかになあ、風が涼しくなったことよ。今日を立秋とはよくもいったものだ。

〔評〕 『古今』や本集に限らず、当時において「立夏」や「立冬」の語が詠み込まれている歌は、殆ど目に触れることがないと言ってよい。しかしそれに反し、当歌のように「立春・立秋」などは『万葉』以来枚挙に暇のない程数多く詠まれている。これは和歌史的に見て、少なくとも歌の世界では、人々の待ち望む季節あるいは様々の情緒を催す季節として春・秋が捉えられていたことの反映とみられる。当歌も、「人々の待ち望む気持」を基本にして、「立秋」が捉えられている。内部的には、上句が詠嘆の「か」で終止し、「にはかにも」と呼応関係をつくって驚きの気持をも表出している点が注意される。

題しらず

218 うちつけに物ぞ悲（し）きこのはちる秋の始（め）をけふぞとおも

へば

〔校異〕 ① けふぞ—けふ（久雲堀）

〔語釈〕 ○うちつけに ふいに。「にはかなり」が単に時間的に急である場合に傾くのに対し、「うちつけなり」はむしろ心理的に急——出しぬけ・唐突・意外——である場合が主である（「うちつけにさびしくもあるかもみち葉もぬしなき宿は色なかりけり」『古今』哀傷⁸⁴⁸・「風波の危ふければ楫取また言はく……」また、言ふに従ひて『いかがはせむ』とて『まなこもこそふたつあれ。唯ひとつある鏡をたいまつる』とて海

にうちはめれば、口惜し。さらば、うちつけに海は鏡の面おもてこの如なりぬれば」『土佐』二月五日・「(若紫ノ) 昼の面影、(光源氏ノ) 心に懸りて恋しければ、『ここにものし給ふは誰にか。たづね聞えまほしき夢を見給へしかな。今日なむ思ひあはせつる』、と聞え給へば、僧都うち笑ひて、『うちつけなる御夢語りにぞ侍るなる。……』」『源氏』若紫。 ○こ

のはちる 秋に於ける自然の諸現象の一つを呈示した形である。しかし、これが秋のありふれた一属性であるゆえ、果して当句に一景としての意味性が賦与されているか判然としない。そこから、単に「秋」を引き出す為の一回性の枕詞としての働きをしているにすぎない、との見方が可能となる。この見解に従った場合、当歌は「このはちる」景によって悲しさが生じたのではなく、「立秋」という点で悲哀感が惹き起こされたことになる。ここに、右の見解に従った場合の難点が見出される。和歌の世界では、通例、「木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」(『古今』秋上184)・「わがために来る秋にしもあらなくに虫の音聞けばまづぞかなしき」(同186)のように、悲愁感はその季節の景物に触発されたり、あるいは事象を介して惹き起こされる作りになっており、その点からみれば「秋」のみで如上の情緒を引き出すとの解釈は無理があるといえよう。従って、「このはちる」は秋の情緒を引き出す役目を多少とも荷っていると考える方が妥当である。すなわち、「このはちる」は意味が賦与されていると考えられ、「物ごとく秋ぞかなしきもみづつつ移ろひゆくをかぎりと思へば」(『古今』秋上187)、という歌を参考すれば、ものの衰えゆくことを意味している、とみられる。 ○

秋の始め 結句に「けふ」とあるから立秋の日を指す。

〔訳〕 ふいにもの悲しい気持に襲われることよ。木の葉が散る秋の、その始まりが今日なのだと思うと。

〔評〕 当歌は立秋を詠んだというより、立秋の日に、秋を迎えた感慨を吐露した体のものである。作者にとって「秋」とは、自然や人間が活力を失って衰微に向かう季節と把握されており、華やかな季節とみなしていない。従って立秋であるとの意識が、此の衰微の「秋」という観念を通じて悲哀の情緒を突然喚び起こすこととなる。

物思(ひ)侍(り)けるころ、秋立(つ)日、人につかはしける
る

219 たのめこし君はつれなし秋風はけふよりふきぬわが身かなしも^⑤

〔朱注〕

く

〔校異〕 ①秋立つ日―あきつたひ(荒) ②人に―人のもとに(久堀片荒) ③たのめこし―たのみこし(久堀片荒) たのめし(雲) ④つれなし―つれなく(中雲堀) ⑤かなしも―カナシナ(片)

〔語釈〕 ○物思ひ 「物思ひ」と体言に解すべきか動詞の連用形とみなすべきか判然としないが、いずれにしろ「思ひ」のタネは歌の上二句に示される、つれない男に関する事である。 ○たのめこし君 「たのめ

く」は、「ずっと頼りに思わせる・今まであてにさせる」意(頼め来し言の葉今は返してむわが身ふるれば置き所なし)『古今』恋四736・「頼めこし春立ちしより青柳のいとやくると思ひけるかな」『宇津保』春日詣。 「君」は男。 ○つれなし 薄情である。 ○秋風 秋に「飽

き」をかけ、男に飽きられた意をきかせている。 ○も 係助詞で文末の終止形を受けて詠嘆を表わす(磯かげの見ゆる池水照るまでに咲

ける馬酔木の散らまく惜し母」『万葉』巻二十⁴⁵¹³・「山河の清き川瀬に遊べども奈良の都は忘れかねつ母」同巻十五⁵⁶¹⁸・「芦辺より雲居をさしてゆく雁のいや遠ざかるわが身かなしも」『古今』恋五⁸¹⁹。なお、終助詞との説もある。

【訳】 悩みごとがありました頃、立秋の日、人に詠み送りました、頼りにしていいと今まで私に思わせていたあなたは、冷たくなつてしまった。秋風が今日から吹き始めた。あなたに飽きられたわが身がとても悲しい。

【評】 初句「たのめこし」は男との仲が以前からのものであることを物語っており、その、相手の男を「つれなし」とみなしているところから男が疎遠になっている状況が推察できる。そのような状態に置かれていた女が、「立秋」にこそ寄せて我が身の嘆きを男に訴えた歌である。

また、当歌は、二・四・結句がいずれも終止形で切れており、結句「かなしも」の「も」の用法（語釈参照）が『万葉』に類出するのに対し、『古今』では比較的古い歌と推定されるものに若干の例を見るにとどまるという事実と相俟って、詠風が訥訥として素朴である、という印象を与え、その点に古躰の揺曳が見られよう。

220 おもふこと侍（り）^① ける^②
いとどしく物思（ふ）^③ やどの萩の葉に秋とつげつる風のわびしさ^④

【校異】 ①ける―ナシ（荒） ②ころ―時（堀） ③萩―萩（久） ④わびしさ―かなしさ（雲）

『後撰和歌集』注釈 井川健司

【語釈】 ○いとどしく 動作・状態が今以上に甚しくなる意（「いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる波かな」『勢語』七段）。『新抄』は「初句いとどしくは末句のわびしさへかけて心得べし」（『増抄』も同意見）とするが、「いとどしく」は連用修飾語であるから、「物思ふ」にかかるとみるべきである。 ○風のわびしさ 「わびしさ」は「やるせなくせつないこと・心細く頼りないこと」で、秋の初風に作者が如上のような感情を抱くというのである。

【訳】 悩みごとがありました頃、
いよいよ物思いに沈む私の、家の庭に茂る萩の葉に「秋が来ましたよ」と告げた風の声が、何と心細く頼りなく感じられたことでしょう。

【評】 悩みごとにより沈む作者が、庭先の萩の葉を渡る秋風にせつなさ・心細さを感じたもので、繊細な感性によって「秋の淋しさ」を捉えた歌である。「いとどしく」は「わびしさ」にかけた方が感情の流れに沿っている点で妥当なのであるが、文法的には許されまい。また、当歌は一見萩の葉が物思い人に擬せられているように受け取れるが、「やど」で既に家あるじの意が汲みとれるのであるから、萩の葉を主人と解する必要はない。風が擬人化されているというだけでよい。また、「物思ふ」はその対象が特定できないが、恋の悩みと解することも不可能ではない。その場合、「秋」は「飽き」を掛けたとみなされる。

ところで、当歌にある「萩の葉」と「秋風」とは、

萩の葉を吹き出づる風ぞ秋きぬと人にしらるるはじめなりける

（『躬恆集』）

萩の葉ぞ風にみだるるおとすなるもの思ふほどに秋やきぬらむ

（『山田集』）

萩の葉のすゑこす風の音よりぞ秋のふけゆくほどはしらるる

〔順集〕

などで明らかなように、きわめて強固な関係をもつことが知られる。当歌は、この取り合わせを利用して詠作されたものである。

題しらず

221 秋風のうち吹(き)そむるゆふぐれはそらに心ぞわびしかりける

〔語釈〕 ○うち吹きそむる 「そむる」は接尾語「初む」の連体形で、

「し始める・初めてしする」意(「うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき」『古今』恋二53・「咲き初めし宿しかはれは菊の花色さへにこそ移ろひにけれ」同秋下280)。吹き始める。 ○そらに心ぞわびしかりける 「そらに」は、さまざまの意が考えられる。『新抄』はこの詞を、『万葉』卷十一²⁵⁴¹「たもとほり往(ゆき)みの里に妹を置きて心空在土は踏めども」や、同卷十二²⁹⁵⁰「吾妹子が夜戸出の姿見てしより情空有地は踏めども」、また『兼輔集』「春霞立ちつる方をながめつつそらなる恋も我はするかな」に見られるように、「すゞろに云々などいふにもやゝ近く、おちつかぬ意ある詞なり」と規定し、「うわのそら」の意とみなす。しかしこの意が適合するのは、例で明らかな如く恋心を中心とした人間関係から引き出される心情の場合が主であり、当歌には通じにくい。一方、『増抄』は「そらに心ぞとは何となく佗しきこゝろなり」との一説を採る。これも前者同様、「そらに」が形容動詞の副詞的用法で、その根本義が「意識の明確さを欠く状態」として把握されて

いる、その範囲内での別意であるが、この意の用例としては、『山家集』上「そらにいでていづくともなく尋ねれば雲とは花の見ゆるなりけり」が挙げられるが、時代が下りすぎる。しかし『実方集』に、「清涼殿御前のすゝきをむすびたるを、たれならんといひて、ないしの命婦のむすびつけさせける ふくかぜのこゝろもしらではなすゝきそらにむすべる人やたれそも」という歌がある。従って、当歌の「そらに」の意としては、後者『増抄』の採る「何ということもなく・これといった理由もなく」が適当し、結句「わびしかりける」を修飾していると考えるのが妥当と思われる。更に、「そらに」は名詞としての「空」が意味として重ねられており、その場合の「に」は格助詞的なニュアンスをもって機能する。

〔訳〕 秋風が吹き始めているこの夕暮は、空を眺めるといふと、わけもなく心淋しいのだよ。

〔評〕 初秋のそこはかとなない哀感を、夕暮の空に着目して表わした歌である。秋の到来を風によって感知する、という発想は『古今』秋上冒頭の敏行の歌に既に見られて周知のものとなっていたと思われるが、初秋の哀感を暮色の空に求めた歌は珍しい。もっとも、初秋と限らないにしろ同様の感覚は本集秋下⁴²³「おほかたの秋のそらだにわびしきに物思ひそふる君にもあるかな」にも表われており、『古今』には見られない表現素材として、注目してよいであろう。

222 露わけしたもとほすまもなき物をなど秋風のまだきふくらむ

① 大江千里

〔校異〕 ①大江千里―ちさと（荒）

〔語釈〕 ○露わけしたもと 「露分く」は、露深い草を押し分ける意（「夏草の露分け衣着けなくにわが衣手に乾る時もなき」『万葉』卷十 1994・「あさまだき露わけきつる衣手のひるまばかりにこひしきやなそ」『拾遺』恋三720）だが、最終的にはこの句は恋愛状態をいう表現である。『古今』恋三622の業平歌、

秋の野にささわけしあさの袖よりもあはでこしよぞひちまさりける
では、「ささわけしあさの袖」は、秋の野の露に濡れた笹葉を、押し分けて濡れてしまった袖の意で、その恋愛状態を後朝の歌と限定しない。当歌もこれと同様に特殊な状況を詠みとることはしない。 ○秋風の「飽き」を掛ける。 219 〔語釈〕 参照。

〔訳〕 露深い草を押し分けてあの人のもとに通って濡れた袂をほすまもなく、どうして人の心にはこんなにも早々と秋風が吹くのであるうか。

〔評〕 一過的な状況を詠った歌ではなく、下句で、男女が会ったばかりでまもないのに、早々と秋風が吹くといった、相手の心がわりを訴えた歌である。

なお、当歌は『新抄』に「又思ふに此作者の歌には、詩句の意をよまれたるものをりく見ゆれば。もしはさる事などやある歌にやと思へど。」とあるが、無用な憶測である。

女のもとより、ふん月ばかりに（昔）いひおこせて待（り）ける

『後撰和歌集』注釈 井川健司

223 秋はぎを色どる風の吹（き）ぬればひとの心も（う）たがはれけり

よみ人しらず

〔朱注〕 のたうひ

〔校異〕 ①女のもとよりふん月ばかりに―七月ハカリニ女ノモトヨリ（片） ②おこせて―おくり（堀） ③の―は（中堀片荒） ④吹きぬれば―はやくとも（堀） ⑤も―ノ（片）

〔語釈〕 ○秋はぎを色どる風 「色どる」は、紅葉させる意（「いとはやも鳴きぬる雁か白露の色どる木々もみぢあへなくに」『古今』秋上 209・「風寒みなく秋虫の涙こそくさば色どるつゆとおくらめ」本集秋上 263・「うちはへて蔭とぞ頼む峰の松色どる秋の風にうつるな」本集秋下 374・「紅の色どる山の梢にぞ秋の深さはまづ知られける」『惠慶集』・「もみぢ葉の色どる露は九重に移る月日や近くなるらむ」『実方集』。萩の葉を色づかせる秋の風の意。

〔訳〕 女のところから、七月頃に言ってきました、

秋萩を彩る秋の風がいよいよ吹いてきましたので、あなたも私をお飽きになってきたのではないかと、お心が疑われることでございます。

〔評〕 秋風が吹き、萩の色の移ろいを見てみると、人の心の「飽き」や「移ろい」を連想させる。そうした相手の心変わりを問う贈歌である。

当歌は、『大和』百六十段に、

おなじ内侍に在中将住みける時、中将のもとに詠みてやりける、
秋萩を彩る風の吹きぬれば人の心も疑はれけり

とありければ、返し

秋の野を彩る風は吹きぬとも心はかれじ草葉ならねば

となむいへりける。

とあり、『大和』の記述では、染殿内侍の詠とする。

また、『六帖』(第一・あきの風)では、当歌の八首あとに次の224歌を置き、本集のような贈答歌の扱いを欠いている。

従って、『大和』の場合では当歌との影響関係が問題になるのだが、おそらく、この223 224の「秋はぎ」歌の贈答が、歌語りの場において、染殿内侍と在中将とのエピソードに結びつけられて『大和』のように語られたもの、と見るのが穏当であろう。

返し

224 あき萩を色どる風は吹^③(き)ぬとも心はかれじ草ばならねば

在原業平朝臣^①

〔校異〕 ①在原業平朝臣—業平朝臣(片荒) ②を—の(堀) 吹きぬとも—はやくとも(中堀) フキヌレト(片)

〔語釈〕 ○心はかれじ 「かれじ」は、「離れじ」と「枯れじ」を掛ける。

○草葉 草の葉(「武蔵野の草ば諸向きかまくも君がまにまに吾は寄りしを」『万葉』卷十四³³⁷)。

〔訳〕 返歌、

萩を色づかせる秋風が吹いたとて、私の心はあなたを離れることはありません。秋風に枯れてしまう草の葉ではありませんから。

〔評〕 心変りを問う贈歌に対して、その表現をとって「私は草葉ではないので枯(離)れることはない」と、掛詞できりかえして、愛の永続を誓ったものである。

源昇朝臣時^①時^②まかりかよひける時に、ふん月の四、五日ばかり^③の、なぬかの日のれうにそうぞくてうじてといひつかはして侍^④(り)ければ

225 あふことはたなばたつめにひとしくてたちぬふわざはあえずぞありける

〔校異〕 ①のアリ(中荒) ②まかり—ナシ(中片荒) ③かよひける—

かよひけるか(荒) ④時—所(中片) ⑤四、五日—五日(荒) ⑥の—に(中堀荒) ナシ(片) ⑦なぬかの日の—七日の(中堀荒) ⑧れうに—ナシ(堀) ⑨そうぞく—サウスク(片) ⑩いひつかはして侍りければ—つかはしたりければ(中荒) の給ひやりて侍りければ(堀) ノタウヒケレハ(片) ⑪ひとしくて—をなしくて(堀荒) ⑫わざ—こと(堀片)

〔語釈〕 ○れう 「料・析」。あらかじめ、その用にあてるために、はからい準備されたもの(「みづからのれうには三合の米おろして食ひつつ」『宇津保』藤原君)。

○たなばたつめ 棚機つ女。機を織る女。ひこ星に対応する星で、星会い伝説の場合には織女(しよくじよ)を指す(「天の川梶の音聞こゆ彦星と織女と今夜逢ふらしも」『万葉』卷十²⁰²⁹・「天の河もみぢをはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ」『古今』秋上¹⁷⁵)。 ○肖^あゆ 似る。あやかる意(「たなばたの長き契りにぞ肖えまし」『源氏』帚木)。

〔訳〕 源昇朝臣が時々通っていた時に、七月の四五日頃に、七夕の

ための式服の仕立てをといひましたので、

あなたとお会いすることは織女と同じくきわめてまれで、裁縫の方はとてもたなばたのようにゆきません。

〔評〕 中国の湖南・湖北地方の古い民俗を記した『荊楚歳時記』に拠ると、七月七日の夜、家々の婦女が糸を結び、七つのあなのある針を作り、庭前に瓜の実を供物にして手わざの上達を祈る。このような裁縫や染色などの技工の上達を祈る祭りを「乞巧奠」と呼ぶが、日本の宮廷でのたなばた祭りは奈良朝中期ごろに行われたらしい。それが年中行事として固定したのは平安朝になってからのようである（『延喜式』）。

当歌は、こうした風習をふまえており、男から七夕の仕立てものを頼まれた際の女の返歌である。年一度という星会いの伝説に絡ませて、遠のきがちな男へのいやみを交えながらも、最終的には男の依頼を受けている歌であろう。

226 天（の）河渡らむそらもおもほえずたえぬ別（れ）と思（ふ）もの
から
題しらず^① よみびとも^②
よみびとも^③

〔朱注〕 しらす

〔校異〕 ①題しらず—たいよみひとしらす（荒） ②よみびとも—ナシ

（荒）

〔語釈〕 ○渡らむそらもおもほえず 「渡らむそら」は、天の河との関係からでてきており、帰ろうとして通って行く空。名詞「そら」は、古

くはこころ、気持の意として用いられたが（「思ふそら安けなくに、嘆くそら安からぬものを」『万葉』巻四534）、以後、不安定な乱れた気分である心理状態をいう場合にも用いられる（「たなばたの逢ひけむそらもおもほえじ別れてのちの心まどひに」『亭子院殿上人歌合』・「星まよふほどを仰ぎてたなばたの安きそらなき雲居なりけり」『中務集』・「たなばたに心をかして天の河うきたる空に恋ひやわたらむ」『能宣集』）。

〔訳〕 別れに臨むと、天の河を渡って帰るべき道がわからなくなるほどに、心が乱れてしまう。もうこれきりと思う別れではないのに。

〔評〕 ○七夕の後朝の心を詠んだもので、年に一度の逢瀬を約束しながらも、別れに臨むとその悲しみで、帰路をも見失ってしまうほど動揺してしまうという心理的な状況を詠っている。

227 雨ふりて水まさりけり天（の）河こよひはよそにこひむとや見し
ふん月^①の七日に、ゆふかたまでこむといひて侍（り）けるに、
あめふり侍（り）ければまでこで^②
源中正筑前守^① 大蔵少輔当年子
近院右大臣孫^②

〔校異〕 ①ふん月—ふ月（雲） 七月（中久堀片荒） ②の—ナシ（中久堀片荒） ③に—ナシ（中久雲堀片）の（荒） ④ゆふかた—よざりかた（雲堀） ヨサリ（片）くれつかた（荒） ⑤までこむ—またこん（雲） コム（片） ⑥いひて侍りけるに—いひおくり侍りて（雲）の給ひおくりて（堀） イヒオクリテ侍リケルヲ（片） いひはへりて（荒） ⑦のアリ（中久雲堀片） ⑧ふり侍りければ—ふり侍れば（中） ふりければ（久）

いたうふりければ(堀片) ⑨みつからはアリ(中久雲堀片荒) ⑩までこで—えまうてこて(堀片) ⑪中正—長方(雲) ⑫こひむ—コヒシ(片)

【語釈】 ○までこむ 「までく」は「まうで来」と同じ。「やってくる」意(「男のただなりける時はつねにまうで、きけるが、もの言ひて後は、かどよりわたれどまで、こざりければ」本集恋六1005詞書)と、「訪問する・行く」意(「ひさしうとはざりける人の思ひいでて、こよひまうで、こん。かどささであひまてと申してまでこざりければ」本集恋六1056詞書)の両方に用いる。この場合、後者の意とする。詞書は、女の立場から書かれているとも解釈しうる書き方になっているが、作者表記に従い男から女の所へ行く意と解釈する。その場合、「ゆふがたまでこむ」の部分で直接話法による中正の言とみて、「までく」に謙退の意識をよみとることも可能であるが、後に地の文で、「までこで」と説明が加えられることから、特にこの部分に直接的謙退の意識をみる必要はないと判断される。 ○よそにこひむ 「よそ(余所)」は「離れた所で」の意で「こふ」に係る。距離的に離れていて直接相見ることができない場合に、想いの切実さを強調して用いる(「いつしかもみむとおもひしあはしまをよそにや恋ひむゆくよしをなみ」『万葉』巻十五³⁶³¹・「よそにのみ恋ひや渡らむ白山のゆき見るべくもあらぬ我が身は」『古今』離別³⁸³)。

【訳】 七月七日に、夕方行く旨を伝えてありましたのに、雨が降り

ましたので行かずに、

この雨で天の河の水が増えてしまいました。七夕の今宵、お会いできずにこうして離れた所であなたを恋慕うことになるうとは、思いもしませんでしたよ。

【評】 次歌と共に、七夕に寄せた恋の応酬。雨ゆえに約束を反古にした男の、言い訳の歌である。『新抄』に「こよひはといふに力あり、二星だに逢ふといふ夜なればこよひは必と思ひつるにといふ意なり」とするが、「まさかよりによって今宵」と、心外な素振りを強調して示したものの。次歌について『抄』が、「七夕になりての返しなり」と記すように、当歌も牽牛星の立場に身を置いての詠と見做される。

返し

228 水まさり浅き瀬^①しらずなりぬともあまのと渡る舟もなしやは よみ人しらず

【校異】 ①しらず—もなく(荒) ②も—は(中久雲堀片荒)

【語釈】 ○あまのと「と」は「戸」あるいは「門」で、川や海の兩岸が迫っている所を言う。「あまのと」は、天空を海に見たてる例(「秋風に声をほにあげてくる舟はあまのと渡る雁にぞありける」『古今』秋上212)、或いは銀河を川に見立てて天の川の川戸の意で用いる例(「織女にあまのとわたるこよひさへをち方人のつれなかるらむ」本集秋上238)があるが、当歌は後者に当たるとする。 ○渡る舟 天の川を間にした二星の逢会については、その渡川の方法が様々に考えられている。『白孔六帖』鵲部所引の『淮南子』佚文とする条等に、「鳥鵲填^{うづめ}河成橋渡^{はス}織女」と、鵲橋を通じての渡川が語られたり、「聳^{あげ}轡^{たづな}驚^{おど}前蹤^{はス}」(『文選』卷三十「七月七日夜詠^ミ牛女^ニ」・「竜駕凌^{あが}霄^{そら}発^{はス}」(『玉台新詠』卷三「詠^ミ牛女^ニ」等々、織女星が仙車を馳せて渡る例も少なくないが、船による渡川の例は本朝にのみ固有のものと思われる。即ち、漢詩文では「靈姿

理雲鬢 仙駕渡潢流」の句に次いで、「窈窕鳴衣玉 玲瓏映彩舟」と並記される例（『懷風藻』五言「七夕」）が見えるが、和歌においては枚挙に暇の無い程である（「ひさかたの天の川瀬に舟浮けて今夜か君が我が来まさむ」『万葉』卷八1519・「天の川浮津の波音さわくなり我が待つ君し舟出すらしも」同1529等）。

〔詠〕 返歌、

この雨で増水し、渡れそうな浅瀬がわからなくなってしまったとしても、天の川を渡る舟までもないことがありましようか。

〔評〕 牽牛星を氣どって言い訳をしてきた男に対して、「熱意のなさは見え見えます」と皮肉ったもの。『新抄』は「七夕になりての返しなり」とする。

①^⑦ 七日、女のもとにつかはしける

④^⑧ 藤原兼三

229 織女もあふよりけり天（の）河この渡（り）にはわたるせもなし

〔朱注〕 なぬか日に

〔校異〕 ①七日―七月（中）七月七日（久雲片）をなしひ（堀）②女のもとに―女に（堀）女ノモトへ（片）③つかはしける―ナシ（荒）

④藤原兼三―藤原兼三朝臣（中久）かねみ（荒）

〔語釈〕 ○織女 一般に機を織る女（神）（「天照大御神、坐忌服屋而令織神御衣之時、穿其服屋之頂、逆剥天斑馬剥而、所墮入時、天服織女見驚而、於梭衝陰上而死」『古事記』上）、あるいは『和名類聚抄』巻一に「兼名苑注云、織女和名太奈波太豆女牽牛足也」、同抄

『箋注』に「或省云、太奈波太」とするように、七夕伝説に因んだ織女星を言う（「天の川霧立ち上る織女の雲の衣の反る袖かも」『万葉』卷十2063）。但し、漢詩文では例えば『本朝文粹』卷八詩序「七夕代牛女惜暁更」応製の題に見るように、「七夕」は「七日の夕」を指し、「牛女」が二星を指すと截然と示されるのに対し、和文に見る「たなばた」は、織女星のみを指す場合の他に、二星を意味する場合（「天の原をちこちに住むたなばたもわがごと物を思ふらむかも」『好忠集』）、更には七月七日乃至その行事を指す場合（「たなばたは明日ばかりと思ふ」『蜻蛉日記』上・「桂のみこ、七夕のころしのびて人にあひたまへりけり」『大和物語』百十四段）等、多様な意味を包含する。ここは、「織女」で以って二星を示したものの。○この渡り ここでの「渡り」は、「うづまさわたりに大輔が侍りけるにつかはしける」（当集恋四880）の用例が示す「辺り」、即ち漠然とした地域を示す意味で用いられている。第三句「天の河」の縁で「渡し場」の意（「狛山に鳴くほととぎす泉川渡りを遠みここに通はず」『万葉』卷六1058）と解したいところであるが、続く結句の「わたるせ」と重複するので採らない。近称の代名詞「こ（の）」により、「渡り」が詠作主体にとって身近な場所であることが示される。「自分のまわり」の意。○わたるせ 『万葉』には「渡り瀬」という語が見られる（「泉川渡り瀬深みわが背子が旅行き衣濡れひたむかも」卷十三3315・「天の川渡り瀬深み舟浮けて漕ぎくる君が梶の音聞こゆ」卷十2067）。河を渡るのに適当な浅瀬を言うのであるが、当歌では女との「逢ふ瀬」の意味が掛けられている。

〔詠〕 七日、女の所へ遣った、

あの七夕の二星でも相違う夜があったのですね、今宵がまさにその時ですのに、この辺りには天の川を渡る浅瀬も見当たらず、お

会いすることも叶いません。

【評】 相逢うことの叶わない女との関係を、七夕の二星に比べて慨嘆したもの。

かれにけるを^(お)とこの^①、七日のよ、まできたりければ、女のよみて待^(り)ける^④

230 ひこぼしのまれにあふよのとこ夏は打(ち)はらへどもつゆけかりけり

【朱注】 よみ人しらす

【校異】 ①のーナシ(雲) ②七日のよー七日よ(中) 七月七日のよさ
り(雲) 七夕に(堀) 七月七日ノヨ(片) ③女のよみて侍りけるーナ
シ(中久荒) 女のよめる(雲片) 女のよめりける(堀) ④よみ人しら
すアリ(中久雲片荒)

【語釈】 ○ひこぼしの「ひこぼし」は、牽牛星。『和名類聚抄』巻一に「牽牛和名比古保之、一云以奴加比保之」とする。『万葉』では、孫星、男
星、牽牛、彦星等と記される。漢籍には黄姑、河鼓とも(東飛伯勞西
飛燕 黄姑織女時相見『玉台新詠』卷九)。「ひこぼしの」を主格と
り全体を比喻歌と考える場合と、枕詞的に「まれにあふよ」を導くとみ
る場合とが考えられるが、ここは後者として解する(【評】参照)。

○とこ夏「常夏の花(撫子)」である(200参照)。ここは「床」の意を
示すための措辞(「ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしよりいと我がぬ

るとこ夏の花」『古今』夏167)。○打ちはらへども「打ち」は接頭語。

床を払うとは、「ま袖もち床うち払ひ君待つと居りし間に月傾きぬ」
『万葉』卷十一2667)、「妹とあれと 手携はりて 朝には 庭に出で立ち
夕には 床打ち払ひ 白たへの 袖さし交へて さ寝し夜や」(同卷八
1629)等に見るように、共寝の床を整える行為であり、相手の訪れがない
時、空闊を嘆く行為となる(「夕されば人なき床を打ち払ひ嘆かむた
めとなれる我が身か」『古今』恋五815)。一方で孤閨に積もる塵や、塵を
払う行為が詠じられている(当集169参照)ことから、具体的には塵など
を払って床を整えることと理解される。猶、「露(けし)」と共に「とこ
夏」に寄せた表現を成す。

○つゆけかりけり「露けし」は「露にぬ
れている」意であるが、同時に「涙にぬれている」状況を示す場合が多
い(「独りぬる床は草葉にあらねども秋くる宵はつゆけかりけり」『古
今』秋上188)。当歌も常夏に置く露のイメージを添えつつ、逢瀬の少な
さを嘆く涙を意味する。

【訳】 通って来なくなってしまった男が、七日の夜やって来たので、
女が次のように詠じました、

年に一度、彦星が織女に逢う今宵、まるで彦星のように珍しくも
あなたを迎え、床を整えようと塵を払いはするのですが、どうも
涙の露で湿っぽいのですよ。

【評】 朱注及び他本に「よみ人しらす」とあるのが整った形で、前歌詠
者藤原兼三が当歌の詠者ではないことを明瞭に示す。底本は、詞書中に
「女のよみて侍りける」と示すだけで、作者表記は無い。

彦星と常夏という素材の取り合わせは、和歌的必然性の薄いものと言
わなければならず、それを一首に統合するのは、七日という折を人事詠
に利用した結果に過ぎない。従って一首全体を二星の立場になって詠じ

た比喻歌と見ることはしない。

231 七日、人のもとより返事に、こよひあはむといひおこせて待
 (り) ければ^⑤
 こひこひてあはむと思(ふ) ゆふぐれはたなばたつめもなくぞある
 らし

〔朱注〕 1 なぬかのよ 2 ひ見

〔校異〕 ① 七日―七日よ (中久雲) 七夕 (堀) 七月七日ユフツカタ
 (片) 七日のよ (荒) ② 返事に―ナシ (中久堀片荒) の返事に (雲)
 ③ はアリ (荒) ④ いひおこせて侍りければ―いひをこせ侍りければ
 (久荒) いひて侍りければ (雲片) いへりければ (堀) ⑤ カヘリコトニア
 リ (片荒) ⑥ こひこひて―こよひこそ (堀) ⑦ あはむ―あひみむ (中
 雲堀荒)

〔語釈〕 ○人のもとより返事に 「人」は女とも男とも解しうる。即ち、
 言いよっていた男への返事に「こよひあはむ」と女が応じたものとも、
 男が女に「今晚伺います」と返事をしたとも取れよう。ここでは女が男
 へ返事を与えたものと解する〔評〕及び次歌参照。 ○いひおこせ
 て侍りければ 「人(女)」が言ってよこしましたので」と当歌を詠ずる
 についての理由を述べる。男の立場からの詞書とみる。 ○こひこひ
 て 動詞の反復により、その動詞の持つ意味を強調する。「切に恋しく
 思つて」の意。『万葉』以来の和歌的言いまわしで、当然ながら、特に
 逢瀬の少なさゆえに募る恋情を詠じる場合に用いられることが多い

『後撰和歌集』注釈 井川健司

〔恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽くしてよ長くと思はば〕『万葉』
 卷四 661・「こひこひてまれにこよひぞあふさかの夕つけ鳥は鳴かずもあ
 らなむ」『古今』恋三 634。『古今』秋上 176 は当歌と同様七夕の折の例
 「こひこひて逢ふ夜はこよひ天の川霧立ち渡りあけずもあらなむ」。
 ○たなばたつめもなくぞあるらし 「かく」の指示する意味内容は、初
 二句に示される。即ち、切実な我が逢瀬への想いと同様の心情を、女の
 受諾の返事を踏まえて、女の側にも認めたもの。七日の夕という折に合
 わせて、女を織女星になぞらえて忖度する体をとる。

〔訳〕 七日、女のところからの返事で、「今晚お会いしましょう」
 と言ってきましたので、

ひたすら恋い焦がれて、お会いしたいと想いを募らせているこの
 夕ぐれは、織女星も同じような想いでいるようですよ(あなたも
 私と同じ想いでいらっしやったのですね)。

〔評〕『伊勢集』諸本に、結句「かくやあるらむ」として載る。

男の詠として試解したが、次歌とで構成される状況が、曖昧にしか示
 されないため、女の詠とする解釈も不可能ではない。その場合は、男か
 らの来訪を告げる手紙に呼応する形で、「恋い焦がれてあなたの訪れを
 待っているこの夕ぐれは、織女星も私と同様のおもいで彦星を待ってい
 るようです」と解釈され、女である詠者が、己れの立場を織女のそれと
 比べる体をとるのでスムーズに理解される。しかし次歌との関連におい
 て新たな不自然さが生じる結果となる。それについては次歌〔評〕参照。

返し

232 たぐひなき物とは我ぞなりぬべきたなばたつめは人めやはもる^②

【校異】 ①とは―とそ（久）には（堀荒） ②は―も（中雲片荒）

【語釈】 ○たぐひなき物 名詞「たぐひ（比・類）」は、「同じくすること、同じもの、同程度のもの」の意。「たぐひなき物」で、「地と比べるものがない稀な存在」となる。女が自分自身を比類なくつらい存在と捉えたのは下句の理由による。 ○人めやはもる 「人めもる」は、他人の目をはばかること（「人目守る君がまにまに我さへに早く起きつつ裳の裾濡れぬ」『万葉』巻十一²⁵⁶³・「心なき雨にもあるか人目守りともしき妹に今日だに逢はむを」同巻十二³¹²²）。「やは」は反語。星合の空を人々が見守ることを踏まえて、「織女星は牽牛星との逢会に、他人の目をはばかったりするだろうか、しはしない」と言うのである。とりたてて反語で強調し、人目をはばからざるをえない我が状況を対比的に示す。

【訳】 返歌、

あなたとの逢瀬に人目をはばかる私こそが、比類なくつらい存在となってしまうそうです。あの織女星だって年に一度の逢瀬には、人目を気にしたりしないのに、私はそうはいかないのですから。

【評】 女の答歌として解する。前歌231詞書によれば、「こよひあはむ」と返したのは当歌の詠者である。従って、男に相逢う意志を伝えたもののそれは何か人目を避けての事であるといった事情を窺わせる贈答として解すべきであろう。男が女を織女星に擬して贈ってきたのに対して、「私は織女にも類えることのできない存在です」と受け、その理由を下句に展開したものとする。

仮に231歌を女の歌とし、231の【評】に示した解釈をとり、当歌をそれに対する男の返歌として解そうとすると、詞書の「こよひあはむ」は当

然男の側からの訪れの予告と見做さざるをえず、当歌の「人目をはばかる」状況はかなり唐突な詠歌内容となる。「たなばたつめ」についても、自己を比定したにしろ、相手の女性を言うにしろ、新たな状況設定を二重・三重に想定しないと、解釈不能となってしまふ。

『伊勢集』（歌仙本）では、

七日

こひこひてあはむとおもふゆふぐれはたなばたつめもかくやあるらん

かつらにありしころ、みかどの給はせし

あふほども河をへだててこふときは七夕つめになにかことなる

御かへし

たとひなき物とは我ぞひかるべきたなばたつめも人めやはもるとあり、小異はあるものの当歌はこの三首目の歌と同一歌であると判断される。この歌の場合は御製の返歌としてあり、当集の贈歌に相当する歌はその一首前に排され、伊勢自身の歌と考えられる。が『伊勢集』の場合も理解しやすい構成とは言いがたく、恣意的な変改あるいは錯誤の予想されるところである（因みに、西本願寺本『伊勢集』では、「こひこひて…」「よひのまにみをなげはつる夏むしはもえてや人にあふとききけむ」「たとひなき…」「あふほどと…」の歌順をとる）。

題しらず

233 あまの河流（れ）てこひばうくもぞあるあはれと思（ふ）せにはやく見む

〔校異〕 ①こひば―あは、(荒)

〔語釈〕 ○あまの河 枕詞的に次句「流れて」を導く。同じ例は242にも見えるが、この語の枕詞的使用は決して一般的なものではない。「まれにのみ逢ふとはすれど天の河の流れ絶えむものにしあらねば」(『続後拾遺』秋上257源公忠。『公忠集』一本にも二句「逢ふとはなきか」、四句「流れて頼む」である)同様に、逢うこと難き七夕のイメージをも含ませて用いられているのであろう。 ○流れてこひば おしなべて、このような形の「流れて」は、古くから「ながらへて」の音約とされてきた。しかし、竹岡正夫『古今集全評釈』はそれに疑義をはさみ、それらの例の一部(「山高み下行く水の下にのみ流れて恋ひむ恋ひは死ぬとも」『古今』恋一494・「冬川の上は凍れる我なれや下に流れて恋ひわたるらむ」同恋二591)は単に「下に泣かれて」に掛けたものと看做すべきで、時間的な意味は一切持たされていず―本集恋一558「いはせ山谷のした水うちしのび人のみぬまは流れてぞふる」も同様であろう―、その外の歌でも、例外なく川・水に関する叙述を何らかの修辭的文脈において、伴いつつ、しかも多くは時間的意味の露わな表現を他に持つことから、流水の景が月日の経過を比喩的に表象しているにすぎない(「明日香川流れて早き月日」『古今』冬341)と指摘している。確かに語法的生成を解く大体論としては首肯される結論であろう。しかしながら、「世ととも、に流れてぞ行く涙川冬も凍らぬみなわなりけり」(『古今』恋二573)・「白河のしらすとも言はじ底清み流れて世々にすまむと思へば」(同恋三666)等はそれで説明しうるとしても、「水の泡の消えでうき身と知りながら流れてなほも頼まるるかな」(『古今』恋五792)・「浮きながら消ぬる泡ともなりなむ流れてとだに頼まれぬ身は」(同827)・「つらしとも思

ひぞはてぬ涙河流れて人をたのむ心は」(本集恋二657)等は、時の経過を示す語を伴わない上、物象の比喩性自体もそれほど鮮明ではなく、「流れての世をばたのまず」(本集雜一1116)という語のつらね方に端的に窺われるように、それだけで已に時間の概念を孕んだ「流れて頼む」という語法(他に658936)は少なくとも成立していたらしく思われる。当歌や242「天の河流れてこふるたなばたの涙なるらし秋のしらつゆ」も、「流れて」の意味を内部的に規定してゆく要素を欠き、この語自身から固有の意味を引き出してくる外ないが、当歌の場合、結句「はやく見む」との対応から、「流れて」だけで「引き続き・いつまでも」の時間的意味を持たせているのは疑えまい。但し、それは竹岡注が説くように、ことばの比喩的意味転換を通して歴史的に形成されてきた語法であって、「ながらへて」の約と考えねばならぬ理由はいささかも存しない。 ○うくもぞある 現在の状態が続いた場合の自身の心意のなりゆきを付度したものの。「もぞ」は懸念の意を表す。「あはれともうし」とも物を思ふ時などか涙のいとなかるらむ」(『古今』恋五805)・「身をうしと思ふ心の懲りねばや人をあはれと思ひそむらむ」(『大和』百四十一段)・「うしと思ふ心をしばし慰めむのちに世人をあはれと思はむ」(『拾遺』堀河具世本、雜上506次)等が示すように、対象へ向かう能動的な情意を表す「あはれ」の対概念として、それが満足すべき結果を得られず内攻し鬱屈した心情を表すのが「うし」であり、ここも下の「あはれ」との対照的な意味合いで把えねばなるまい。 ○あはれと思ふせ 「あはれと思ふ」は、男女間にあっては思慕の情の高まりを意味する(「昔、男ありけり。女をとかく言ふこと月日経にけり。岩木にしあらねば心苦しと思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり」『勢語』九十六段)。「せ」は時節・機会の意だが、「瀬」に通じ、当歌同様専ら川との縁で使用される語である

〔天の河こひしきせにぞ渡りぬるたぎつ涙に袖はぬれつつ〕本集秋上245・「心みに猶おりたたむなみだがはうれしきせにも流れあふやと」同恋二613)。

〔訳〕 天の河が両星を隔てたまま永い時の流れを流れてゆくように、このまま空しく恋い続けるばかりでは、苦しさだけが募ってゆくかもしれない。かなうことなら、想いのつっているこの時を移さず逢いたいものだ。

〔評〕 「天の河」と詠い出してはいるものの、七夕の歌とは読み取りがたい。独詠的に自らを励ましたとも相手の許諾を促した贈答歌とも、その詠まれた事情は判然としないが、いずれにもせよ、実際の男女交渉を踏まえた歌と思われる。

流れてと頼むるよりは山川の恋しきせに渡りやはせぬ

〔拾遺〕恋一691)

と類想であるが、当歌は作者自身の恋情の昂揚と、それが充たされぬ時の鬱情を叙べたものであろう。『抄』の「行末に人の心もかはりて、恋のうくもぞあらん。今人の哀と思ふ時に、早くあひみんと也」という解釈では、作者が相手の感情・態度を予見的に論理化していることになり、妥当でない。

234万 玉鬘絶えぬものからあらたまの年の渡(り) ①はただひとよのみ

〔校異〕 ①は―を(雲堀)に(荒)

〔語釈〕 ○玉鬘絶えぬものから 牽牛・織女の契りは永遠に絶えないも

の。『玉鬘』は葛類の美称。葛が長く延びる事から「絶えぬ」を導く(「つがの木」いや継ぎ継ぎに 玉葛 絶ゆることなく ありつつも止まず通はむ『万葉』卷三324)。その外「か(縣・掛)く(本集161)、『延ふ』(『万葉』3067)、『遠長く』(同443)、また同音関係で「葛城山」(本集391)、『繰る』に掛けて「来る」(同1003)を導く。○あらたまの年の渡りは「あらたまの」は「年」の枕詞。原義については諸説あるが、

いずれも臆測の域を出ない。「年の渡り」については二つの解がある。一つは、「渡り」を「渡河」の意(「初瀬に詣でて、淀の渡りといふものをせしかば、舟に車をかきすゑて」『枕草子』百十四段)にとり、「年ごとの渡り」(『雅言集覧』、つまりは「七夕の年に一夜の逢瀬を云」とする『抄』の説、もう一つは、「年渡るまでも人は有りといふを」(『万葉』卷十三3264)等の「年渡る」と同じく、一年を経る間といったほどの時間的な意味合いにとる『新抄』の説である。なお、『万葉』の原歌ではこの部分「さ寝らくは年の渡りに」となっており、これに対しては一般に後者の解が取られていて、当歌の本文に関しても『新抄』は「仁」↓「波」の誤写の可能性を示唆している。当期の歌における用例としては、「忘れてふことをも知らぬ織女や年の渡りを待ちて逢ふらむ」(『伊勢集』)・「あらたまの年の渡りをあらためぬ昔長柄の橋と見やせし」(『敦忠集』)・「恋ひわたる年の渡りはたなばたの片時もあかず別れぬるかな」(『家持集』)・「天の河 安の河原に あり通ふ 年の渡りに」(『赤人集』)・『万葉』卷十2089「出と乃渡丹」の訛伝)を検出しようもの、

いづれとも決めがたく、後代の作例(『拾遺愚草』上・『新千載』秋上326・『新拾遺』秋上337・『新後拾遺』秋上291・『新葉』秋上266)まで目を広げて一方に決しえない。しかし、「年の恋今夜尽くして明日よりは常のごとくや我が恋ひ居らむ」(『万葉』卷十2037)・「安の川い向かひ立ち

て年の恋日長き児らが妻問ひの夜そ」(同卷十八⁴¹²⁷)の「年の恋」を「一年にわたる恋」(澤瀉『注釈』)と解するならば、「年の」自体が既に「一年の間の」といった意を帯びていることになるし、しかも、体言化された「わたり」が通常時間的意味には使われない事をも考量すれば、やはり『抄』の解釈に傾くかと思われる。『万葉』の原歌においても『全釈』がその立場を取っているが、原義はさて置いて、少なくとも中古における理解がそのようなものであったことは、「月に二たびばかりの御契りなめり。年の渡りには立ちまさりぬべかめるを」(『源氏』松風)が明証となるであろう。〔評〕 参照。

〔訳〕 二星のなからいほ悠久に絶えることはないけれど、一年の間に天の河を渡って歓を尽くすのはたった一夜だけなのだ。

〔評〕 既述のように、『万葉』卷十²⁰⁷⁸、玉葛、不絶物可良 佐宿者 年之度余 直一夜耳

の異伝歌である。『六帖』一にも「さぬる夜は年の渡りに」の本文で採られ、『人麿集』にも、初二句は全く異なるものの三句以下は『六帖』と同一歌詞のものが見える。要するに本集の本文が特異であることになるが、おそらくは、上代的な響きを持つ原歌の第三句が枕詞に置き換えられ、そのため代わって第四句が主格に転じたものと思われる。もし「年の渡り」が原義と異なるとすれば、その辺りに要因があるうし、少なくとも、これを「一年を経て」と解すると、当歌の本文では三句以下の主語を欠くこととなって全体の意を汲み取れまい。ともあれ、当歌によって「年の渡り」という熟語が七夕にまつわる一成語として定着するようになったものと想察され、以後はそれ自体で「年にただ一夜の逢瀬」の意を持って襲用されたのであろう。

歌は、牽牛と織女の、悠久ながら定めによって隔てられた悲恋を詠う、

頗る単純かつ観念的な内容で、

年ごとに逢ふとはすれどたなばたのぬる夜の数ぞ少なかりける

(『古今』秋上179)

国も狭に常に逢ふ名は立つめれどあひ見ることはただ今宵なり

(『六帖』一、「七日の夜」)

など、類想の作は少なくない。詩にも、

何為^レ霊匹久相思 一歳唯成一会期

(『本朝麗藻』上「牛女秋意」)

と、当歌とよく似た結構のものがあって、一つのパターン化した詠み方であったと知られる。

235 秋の夜の心もしるくたなばたのあへるこよひはあけずもあらなむ^①

〔校異〕 ①あへる―あくる(荒)

〔語釈〕 ○秋の夜の心もしるく 「秋の夜の心」とは、秋夜が本来的に蔵している観念を言う。「心」は内容・趣旨といった意味のこともある(58参照)が、ここは、伝統的に形成されてきた、事物に固有の文学的、内在的本性、すなわち「本意」の意に近い。「いひわづらひてやみにけるを、又思ひいでとぶらひ侍りければ、いと定めなき心かなといひて、あすか河の心をいひつかはして侍りければ」(恋六¹⁰¹⁴)がこれに類する用い方である。当歌の場合は、構文から考えれば、結局「夜長」(「秋の夜も名のみなりけり逢ふといへばことぞともなく明けぬるものを」『古今』恋三⁶³⁵・「睦言もまだ尽きなくに明けにけりいづらは秋の長してふ

夜は「同雑牀¹⁰¹⁵」ということになる。「くもしるく」は、予想通りの結果が現れること（「妹が家の門田を見むとうち出まし心もしるく照る月夜かも」『万葉』巻八¹⁵⁹⁶）。すなわちこの二句、「秋の夜は長い」というその言い慣らし通りに「の意で、結句にかかる。○たなばたのあへるこよひ」「たなばた」は「たなばたつめ」の略、つまり織女星を指す（229参照）。但しここは、「たなばたの今夜あひなば常のごと明日を隔てて年は長けむ」（『万葉』巻十²⁰⁸⁰）・「年ごとにあふとはすれどたなばたのぬる夜の数ぞ少なかりける」（『古今』秋上¹⁷⁹）等と同様、両星の出会いを「たなばた」の一語に託したものと見ておきたい。なお「たなばた」の語義展開については次回の注釈（238）に譲る。

〔訳〕 秋の夜は長いというが、その言葉どおり、天上の二つの星が年に一度の出逢いの時を持っている今宵は、いつまでも明けずにいてほしいものだ。

〔評〕 同趣の歌に、

恋ひ恋ひて逢ふ夜は今宵天の河霧立ちわたり明けずもあらなむ

（『古今』秋上¹⁷⁶）

がある。また、七夕に秋の夜長を絡めたものは、詩には「……解^レ帶^レ遠^ニ廻^シ軫^シ」誰云秋夜長^{いとはシミテハ} 愛^レ聚^レ双情款^{よろこびおもてテハ} 念^レ離^レ両心傷^ハ（『芸文類聚』四、宋孝武帝「七夕」、歌にも、やや下って、「秋の夜を長きものとは星あひの影見ぬ人の言ふにぞありける」（『後拾遺』秋上²⁴³、能因）が見える。前歌同様、七夕そのものを題材として第三者的立場から詠った作であるが、読人しらずながらも、「秋夜」にまつわる伝統的観念を引き合わせたりするところなど、かなり観念性の色濃い創作歌であることを想わせる。

236 契^①（り）^{（初）（事）}けむ言の葉今は返してむ年のわたりによりぬるもの^{（物）}を

〔校異〕 ①契りけむ―契おきし（中） ②によりぬる―はふりぬる（中）
 〔語釈〕 ○契りけむ 『古今』秋上¹⁷⁸「契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたび逢ふは逢ふかは」の「けむ」について、「伝説として聞いたことを表わすのだから、過去の伝聞とでもいうべきものである」（小沢正夫校注、全集『古今和歌集』）、あるいは、契った折の「織女星の心の中を彦星が思いやって言っている」（竹岡正夫『全評釈』）との説明がある。だが、第三者的立場からの作であるにせよ、彦星の立場に立っての作であるにせよ、その「けむ」に伝聞や推量の意を汲み取る必要はない。「今朝はしも起きけむ方も知らざりつ」（『古今』恋三⁶⁴³）・「かへりけむそもしられず」（本集恋二⁶⁷⁶）等の後朝の歌や「契りけむ言やはたがふ」（『六帖』五）など、当事者の行為に付く「けむ」も、「契りけむ天の彦星」（『時明集』）・「契りけむ日をも過ぐさぬたなばた」（『中務集』）の「けむ」も、明瞭に認識済みの事柄を幾分醜化しているに過ぎまい。少なくとも、自らの恋を詠む当例がいわゆる過去伝聞でないのは確かであろう。○年のわたりによりぬるものを「年のわたり」は年に一度の交会（234参照）。結句は難解で、『新抄』は「なりぬるものを」の誤写説をうち出しているが、あくまで「よる」の語義範囲内で考えるとき、「寄る」すなわちある状態に偏る意（「人柄あやしうはなやかにをしき方に寄りて」『源氏』野分）、もしくは「依る」すなわち頼みとする意（「伊勢の海人も舟流したる心地して依らむ方なく」『古今』雑牀¹⁰⁰⁶）のいずれかということになる。下句全体の意味は、前者ならば

「年に一度のたまさかな逢瀬になってしまつて」、後者ならば「年に一度の訪れなりともあてにしていたのに（それさえなくて）」との解がそれぞれ導かれる。上句とのつながりで考えた場合、初めの解では歌末「ものを」がやや浮いてしまうようだが、詠嘆の余情表現と見ることが許されよう。一方、後の解では余意を汲まねば上句と連絡せず、しかも「よりにし」でなく「よりぬる」である事に時制上の疑問が湧く。ひとまず前者で解しておくが、いづれにしても語法的には幾分の無理が感ぜられる事は否めず、その由因は全体の縁語的構成（「評」参照）にあるものと思われる。

【訳】 昔約束なさった言葉は、そっくりお返ししましょう。あの七夕な

みの、たまさかなおいでになってしまった今となっては……。

【評】 詠者自身の恋の歌と思われるが、七夕詠に特有の「年の渡り」の語によってこの位置に排されたものである。逢うこと稀な七夕二星のイメージを重ね合わせながら、足遠くなった男への恨みを皮肉を込めた口調で言い送った歌で、上句の類似する、

右大臣すまずなりにければ、かの昔おこせたりける文どもをとり集めて、返すとてよみておくりける

頼めこし言の葉今は返してむ我が身ふるれば置き所なし

（『古今』恋四736）

と似たような情況に成った作であろう。

ところで、磯足『疑問』が、「ワタリニヨルトハ、木葉ノ水ニナガレキテヨル由ノ詞ノ縁也」、つまり「言の葉」「渡り」「寄り」の寄せと説いている。これはいささか無理な理解と言うべきだが、（天の河の）「渡り」（波が）「返し」「寄り」と措かれたと読むのは可能だろう。「年の渡り」の語が修辞上の要めにもなっているわけで、下句の不明瞭さも

そこに起因していると考えられる。

① 七日、越後藏人につかはしける

237 逢（ふ）事の今夜過（ぎ）なば織女におとりやしなむこひはまさりて 藤原敦忠朝臣

【朱注】 なぬかひに

【校異】 ① 七日―七月七日（久片荒）なぬかの日に（雲）七夕（堀）

② 越後藏人に―藏人ノモトニ（片）③ 藤原敦忠朝臣―敦忠朝臣（中久雲片荒）敏忠朝臣（堀）④ に―の（雲）

【語釈】 ① 越後藏人 天徳四年（九六〇）内裏歌合の右方人に「越後」（十巻本。廿巻本には「越後命婦」）の名が見える。敦忠の卒した天慶六年（九四三）以前女藏人で、その後命婦の列に加えられたらしいが、その他は不詳。女藏人は下臈の女房（『禁秘抄』中、女房）で、諸宴節会の奉仕・御膳供奉、殿上日課の検校・供奉、君側の用など、諸々の雑役を務める。呼称に国名を付けるのは中臈・下臈の例であるが、『女房官品』に「但馬・尾張・美作・越後・備後・加賀・是等は中ほどの国名也」とある。② 逢ふ事の今夜過ぎなば 直訳すれば、「逢う機会が今宵を逸してしまつたら」の意で、非人称を主格化した叙法である。「過ぎ」は肝腎な物事に触れることなく通過すること（「来べきほど時過ぎぬれや」『古今』物名423）。③ こひはまさりて 「吉野川岩切り通し行く水の音には立てじ恋ひは死ぬとも」（『古今』恋一492）と同じく、「こ

ひまさりて」に強めの「は」が添えられたものであろう。想いが叶わぬゆえに空しく恋慕の情ばかりが募ってゆくことを表すが、言葉の上ではすぐ前の「おとりやしなむ」に対置されているか。

〔訳〕 七日に、越後藏人に遣った、

もし、今宵も逢えずに過ぎてしまったなら、年に一夜だけ逢うたなばたにも、この身は劣ることになりはしますまいか、いたずらに恋心を募らせるばかりで――。

〔評〕 風流貴公子として令名を馳せた敦忠の、華やかな恋愛交渉の一端を示す歌である。全体の詠みぶりからすれば、未だ関係を結ばぬ前の求愛の歌であるのは確かだが、少し見方を変えるなら、七月七日という「折」を捉えての気易い詠みかけで、あながちに切実な内容を読み取るべきでないかもしれない。

因みに、「織女におとりやしなむ」の条りは女の無情を難じたと受け取れないでもないものの、

あひ見ずてひと日も君にならはねばたなばたよりも我ぞまされる

（『貫之集』）

世々をかけ契らぬ仲のはかなきはたなばたつめに劣るなりけり

（『道命阿闍利集』）

のような例もあるので、これもやはり男である作者が自身の立場にひき較べての言と解せよう。